

## 大坂蔵屋敷の住居史的研究

主査 谷 直樹\*<sup>1</sup>

委員 中嶋節子\*<sup>2</sup>, 植松清志\*<sup>3</sup>

本研究は、近世大坂における蔵屋敷の住居史的な解明を目的としたものである。すなわち、その建築構成、施設の機能、空間構成の特質等を明らかにし、さらに都市大坂との関わりを蔵屋敷の年中行事を通して考察した。大坂蔵屋敷関係の資料は各所に分散しているので、まず資料の所在確認を行い、約 16 藩の蔵屋敷関係の資料を収集する事ができた。主に指図を分析した結果、東国と西国、大藩と小藩等で施設の構成等に差異がある事を明らかにした。また蔵屋敷内には本国の代表的な社が勧請されており、その祭礼は「蔵屋敷祭礼」として大坂の年中行事に掲げられている。蔵屋敷は経済的な機能だけでなく、大阪の都市文化を考える上でも重要な施設であった事を指摘した。

キーワード：1) 大坂, 2) 蔵屋敷, 3) 藩, 4) 指図, 5) 建築構成,  
6) 御殿, 7) 空間構成, 8) 神社, 9) 船入り, 10) 蔵屋敷祭礼

### STUDY ON OSAKA KURAYASHIKI IN RESIDENTIAL HISTORY

Ch. Naoki Tani

Mem. Setsuko Nakajima and Kiyoshi Uematsu

This study elucidates Osaka Kurayashiki in the modern residential history and discusses its relations with the city Osaka through its annual events. We have gathered references on Kurayashiki in approximately 16 Han and analyzed mainly Sashizu. The result shows that there were differences in the organization of facilities between Togoku and Saigoku or between small and large Han; that a representative Yashiro in the hometown was miniaturized in Kurayashiki; and that the Kurayashiki festival was annually held around that Yashiro. We have pointed out that Kurayashiki played important roles both economically and culturally.

#### 1. はじめに

##### 1.1 研究の意義と目的

江戸時代の大名が大坂に設けた屋敷は、国許では「大坂御屋敷」等と呼ぶが、地元大坂では、米蔵と住居の機能をもつ事から「蔵屋敷」と呼ばれる場合が多い<sup>#1)</sup>。

江戸時代の大坂は、慶長期から引き続き西国大名の年貢米市場として機能する。さらに、幕府の政策とも相まって、米穀以外の物産も集まるようになり、諸大名は、参勤交代の経費や江戸での生活費等を確保するために、米穀や特産物等の販売機関としての蔵屋敷を設けるようになった。こうして大坂は、全国市場の中心すなわち「天下の台所」として繁栄する。

これまでの大坂蔵屋敷に関する研究は、制度や蔵米・蔵物の流通等に主眼をおいた商業史・経済史分野での研究を中心に多くの成果が蓄積されてきた<sup>#2)</sup>。近年では、森泰博氏が府内藩・鳥取藩・高知藩・福岡藩・金沢藩・佐賀藩等の蔵屋敷<sup>#3)</sup>の成立事情や業務等について詳細な研究を行われている。一方、渡辺忠司氏や塚田孝氏により、蔵屋敷の設置と移転の経緯や、取引物産の販売以外

の役割を蔵屋敷がもっていた事が明らかにされたり<sup>#4)</sup>、考古学では、発掘遺構と文献との照合による検証も行われる<sup>#5)</sup>等、研究分野が拡張し、研究内容も深まりつつある。しかし、蔵屋敷の建築に関する研究は、筆者らの研究<sup>#6)</sup>があるのみである。この分野における研究は緒に付いたばかりであるが、これまでの研究に対し、住居史的な観点から蔵屋敷の変遷、建築構成・空間構成、居住性等を検討する事は、蔵屋敷の全貌を解明するうえで必要不可欠な事と考えられる。

そこで本研究では、各藩の大坂蔵屋敷の敷地や立地、建築構成、藩主が参勤交代の際に滞在した御屋形(御殿)の空間構成や機能、業務関連施設等について、都市との関連も考慮に入れつつ、指図や文書資料等を用いて検討を行い、蔵屋敷の研究に新たな知見を提供する事を目的とするものである。

##### 1.2 資料

本研究を行うにあたり、以下の方法で資料を収集した。

①刊行されている図書館・博物館の所蔵目録や『国

\*<sup>1</sup> 大阪市立大学大学院 教授 \*<sup>2</sup> 大阪市立大学大学院 講師 (当時助手) \*<sup>3</sup> 大阪人間科学大学 助教授 (当時大阪府立西野田工業高等学校 教諭)

書絵目録』、関連論文等から検索を行った。

②全国の図書館・博物館に、大坂関係の資料の有無のアンケート調査を依頼し、その結果から現地を訪問<sup>※7)</sup>して資料の閲覧・撮影等を行った。

③現存する遺構や伝承のある遺構の実測・聞き取り調査。絵画資料や古写真等の収集。

近世大坂における大規模な火災は、享保9年(1724)と寛政4年(1792)の大火で、蔵屋敷への被害は、判明するだけで前者は30ヶ所<sup>※8)</sup>、後者は16ヶ所<sup>※9)</sup>に及んでいる。これらの大火とその後の復興が、蔵屋敷更新の画期になったと考えられる。そう見ると、享保の大火以前(およそ17世紀)、享保の大火以後と寛政の大火の間(およそ18世紀)、寛政の大火以後(およそ19世紀前期)で屋敷の状況が変化している可能性が高い。そこで、収集した16藩31点の指図を年代順に表1-1に示した。同表によると、最古は慶安元年(1648)の岡山藩である。

表1-1 諸藩大坂蔵屋敷の指図

指図年代 和暦	西暦	藩	縮尺	寸法(mm)	描法	所蔵・出典等
慶安元	1648	岡山	7分針	983×595	着彩貼図	岡山大学付属図書館
貞享3	1686	岡山	10分針	1670×902	書図	
元禄5	1692	佐賀	8分針	1980×2175	着彩貼図	日本生命保険相互会社
元禄	1695	佐賀	—	—	<書図>	『江戸建築叢話』
<17c末~18c初>	1699	広島	9分針	—	着彩書図	広島市立図書館
享保7	1722	津軽	6分針	415×515	書図	弘前市立図書館
寛保3	1743	佐賀	10分針	2260×1203 2265×1530	書図	日本生命保険相互会社 上段:北半・下段:南半図
<明和7以降>	1770	長州	6分針	1300×1650	書図一紙書色	山口県文書館
天明6	1786	熊本	4分針	1716×1195	着彩書図	熊本大学永書文庫
<寛政2~12>	1790	高知	5分針	1538×1378	着彩書図	安芸市立歴史資料
寛政4	1792	対馬	—	—	書図	対馬歴史民俗資料館
<文化10~文政6>	1813	津軽	6分針	580×820	書図	国立史料館
文化14	1817	秋田	5分針	315×1025	書図	秋田県公文書館
<天保>	1836	津軽	—	—	書図	弘前市立図書館
天保12	1841	徳和野	—	—	<書図>	『江戸建築叢話』
嘉永2	1849	秋月	14分針	553×805	書図	福岡市立博物館
安政6	1859	津山	10分針	1365×800	書図	津山郷土博物館
万延2	1861	桑名	—	—	<書図>	『徳川時代の米穀配給組織』
慶応2	1866	広島	—	—	着彩書図	大阪商業大学商業史博物館
慶応3	1867	松代	—	—	書図	国立史料館
不明	—	岡山	10分針	1224×212	書図	岡山大学付属図書館
不明	—	岡山	10分針	854×308	書図	
不明	—	広島	—	—	—	広島市立図書館
不明	—	鳥取	<4分針>	1090×1590	着彩書図	鳥取県立博物館
不明	—	(三原)	14分針	457×1223	書図	三原市立図書館
不明	—	対馬	—	—	<書図>	
不明	—	対馬	—	—	<書図>	大韓民国国史編纂委員会
不明	—	対馬	—	—	<書図>	
不明	—	対馬	—	—	<書図>	
不明	—	対馬	—	—	<書図>	対馬歴史民俗資料館
不明	—	対馬	—	—	<書図>	

※欄外欄の「-」は未収録(以下同じ)。所蔵先:大韓民国国史編纂委員会の所蔵は、大坂歴史博物館にてコピーも閲覧させていただいた。対馬歴史民俗資料館の所蔵は非公衆であるが、岡山大学付属図書館が調査された際の資料を閲覧させていただいた。  
※○付きは推定。(三原)は広島県尾上田原支配。  
※大坂藩の『江戸建築叢話』(中公文庫、昭和59年)、鈴木匡二『徳川時代の米穀配給組織』(農書堂書店、昭和13年)

また津軽藩のように、屋敷の変遷が窺える指図もある。指図の描法を見ると、元禄期までは着彩貼図が見られるが、それ以後は書図が主となり、一般的に貼図が古い事が窺われる。

## 2 諸藩の大坂蔵屋敷の建築構成

### 2.1 立地と規模

蔵屋敷を設置した大名は、表2-1に示すように、大坂より西国では九州が圧倒的に多く、これに中国・四国を加えると、天保6年(1835)に存在した104邸のうち60邸、つまり約58%が西国諸藩の蔵屋敷であった。

表2-1 大名蔵屋敷の分布

地域 和暦/西暦	奥羽	関東	中部	東海	近畿	中国	四国	九州	不明	計
延宝7/1679	0	1	4	1	13	21	13	30	6	89
元禄15/1702	2	4	4	2	15	20	12	36		95
延享4/1747	3	6	3	5	13	15	12	32		89
安永6/1777	2	8	4	4	12	13	11	29		83
享和元/1801	2	9	4	4	12	13	11	30		85
文化11/1814	6	8	5	3	14	16	14	30		96
天保6/1835	7	10	5	5	17	15	13	32		104

出典:『諸大名御屋敷付』『諸大名蔵屋敷一覽』(『大阪編年史第26巻』所収)『新修大阪市史第3巻』

地域の内訳:奥羽=陸奥・羽羽、関東=上野・下野・常陸・下総・武蔵・相模、中部=美濃・伊勢、近畿=近江・大和・山城・摂津・河州・和泉・和歌山・丹後・但馬・播磨・淡路、中国=備前・備中・備後、安芸・周防・長門・因幡・出雲・石見、四国=阿波・讃岐・土佐・伊予、九州=豊前・豊後・日向・筑前・筑後・肥前・肥後・薩摩・対馬

表2-2 諸藩大坂蔵屋敷の敷地規模

藩	石高 (石)	屋敷名	敷地規模 (坪)	年代	
				和暦	西暦
岡山	472,000	大坂屋敷	約1100	慶安元	1648
岡山	472,000	中之嶋屋敷	約1154	<貞享3>	1686
佐賀	357,000	大坂屋敷	約4200	元禄5	1692
佐賀	357,000	伊万里陶器蔵	約1067	<元禄>	1695
広島	426,000	中之島屋敷	約4000	<17c末~18c初>	1699
津軽	47,000	大坂屋敷	約517	享保7	1722
小笠原	—	大坂屋敷	約2249	寛延元	1748
福岡	473,000	大坂屋敷	約2552	寛保頃	1742
佐賀	357,000	大坂屋敷	約4200	<寛保3>	1743
長州	369,411	大坂屋敷	約3401	<明和7以降>	1770
熊本	540,000	大坂屋敷	約8270	天明6	1786
高知	202,600	大坂屋敷	約4495	<寛政2~12>	1790
対馬	20,000	大坂屋敷	約809	寛政4	1792
津軽	47,000	大坂屋敷	約740	<文化10~文政6>	1813
秋田	200,000	大坂蔵屋敷	約934	文化14	1817
津軽	47,000	大坂屋敷	約740	<天保>	1836
津和野	43,000	紙蔵屋敷	約1836	天保12	1841
秋月	50,000	大坂蔵屋敷	約344	嘉永2	1849
津山	186,500	大坂蔵屋敷	約615	安政6	1859
桑名	150,000	大坂屋敷	約416	万延2	1861
広島	426,000	大坂屋敷	約4000	慶応2	1866
松代	120,000	大坂屋敷	約281	慶応3	1867
徳島	257,000	大坂屋敷	約5200	明治2	1869
高松	120,000	大坂屋敷	約569	明治2	1869
柳川	109,600	大坂屋敷	約1557	明治2	1869
岩国	60,000	大坂屋敷	約429	明治2	1869
丸亀	51,000	大坂屋敷	約1047	明治2	1869
龍野	51,000	大坂屋敷	約457	明治2	1869
桂築	32,000	大坂屋敷	約2012	明治2	1869
岡山	472,000	西信町屋敷	約147	不明	—
岡山	472,000	天満屋敷	約1830	不明	—
広島	426,000	浜屋敷	約424	不明	—
鳥取	325,000	大坂屋敷	約5400	不明	—
(三原)	28,000	大坂屋敷	約287	不明	—
対馬	20,000	大坂屋敷	約3402	不明	—
対馬	20,000	浜屋敷	約313	不明	—
対馬	20,000	浜屋敷	約564	不明	—
対馬	20,000	大坂屋敷	約803	不明	—
対馬	20,000	本屋敷	約808	不明	—

\*屋敷名は指図に従う。記載が無い場合は「大坂屋敷」とした。

\*年代<元禄>の西暦はその中前期とした(以下同じ)。

大坂より東国では、中部のうち北陸・越後の諸藩が初期から、関東・東海では18世紀半ば以降に蔵屋敷を設置する藩が増加している。奥羽では、元禄5年(1692)にその存在が確認できる弘前藩が最も早い。

同表によると文化11年(1814)の蔵屋敷数は96邸であるが、文化3年には全蔵屋敷101邸が確認できる<sup>※10)</sup>。そのうち、水運の良い中之島・江戸堀川周辺には85%にあたる86邸が集中していた。この地域の東部は大川に近く、伏見への交通が便利で、西部は川口に近く、瀬戸内海との連絡が良かったため、多くの蔵屋敷が設けられた。

諸藩の蔵屋敷のうち、敷地規模が判明するものを表2-2に示した。藩によっては、蔵米や特産物等を主に取

納する屋敷を別に持っている場合もある。敷地規模で見ると、西国の大藩で比較的初期から設けられている蔵屋敷は、概ね大規模で、水運の便利な場所に立地している。津軽藩は秋田藩に比して小規模藩であるが、早期に大坂市場へ参入したため、天満の水運の良い場所を確保している。

## 2.2 建築構成

最初に、近世大坂における典型的な蔵屋敷として西国の佐賀藩蔵屋敷と東国の津軽藩蔵屋敷を取り上げ、その建築構成を見ておきたい。

佐賀藩は、慶長期にすでに大坂に蔵屋敷を設けた西国の大藩で、筑前・中国・広島蔵とともに「四蔵」と並び

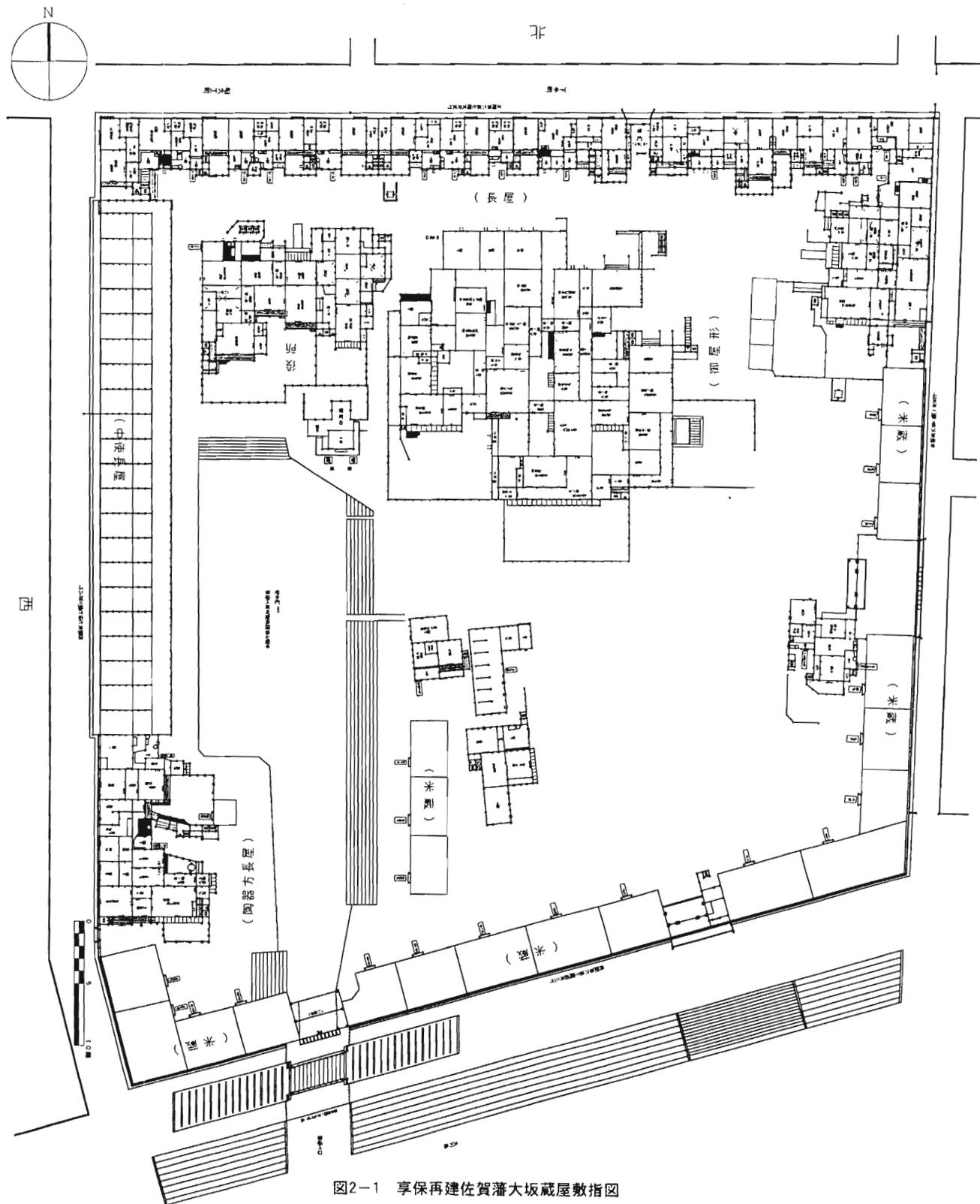


図2-1 享保再建佐賀藩大坂蔵屋敷指図

称されていた<sup>#11)</sup>。同藩の享保再建蔵屋敷の建築構成<sup>#12)</sup>を、図2-1に掲載した。同屋敷は南を堂島川に面し、周囲は、南面と東面の2/3を米蔵、東面の残りと北面を家臣住居である長屋(留守居役宅を含む)、西面の2/3を仲仕長屋、残りが特産の伊万里焼きを扱う陶器方長屋で囲繞されていた。門は、東面中央部と南面東寄りにあり、西面寄りの堂島川と敷地内部に設けられた船入りの境に水門が設けられている。敷地の中央部北側に参勤交代時に藩主が滞在する「御屋形」(御殿)、その西には役所や稲荷社が設けられている。なおこの稲荷は、佐賀の稲荷祭りとして後年、非常な賑わいを見せている。西部の船入りの東に沿って、米蔵と米会所が設けられている。西面の仲仕長屋は、敷地が区切られている事から、貸家であった事が窺われる。以上のように、西国の大藩である佐賀藩の大坂蔵屋敷は、御殿・長屋等の居住施設、米蔵・役所・会所等の業務施設の他、神社や船入り・貸家等が設けられていた。

一方、津軽藩大坂蔵屋敷は、佐賀藩蔵屋敷の東隣に位置し、享保の大火後に再建された。その様子を図2-2で見ると、南面の東半分は塀で、他は米蔵と長屋で囲繞されている。敷地中央部に役所や留守居住居等、その東部に金蔵が設けられるが、御殿はなく、西国諸藩の蔵屋敷と異なる構成が窺われる。

次に、本研究において収集した指図を分析し、その建築構成を表2-3に示した。同表をもとに、各藩蔵屋敷の建築構成等について見ていく事にしたい。

御殿は、西国のほとんどの蔵屋敷で設けられている。また、佐賀・岡山・広島藩等では複数の屋敷を有していたが、御殿は1ヶ所しかなく、御殿が設けられた屋敷を本屋敷と見る事ができる。一方、津軽・秋田・松代藩には御殿が設けられていない事から、東国諸藩の蔵屋敷の

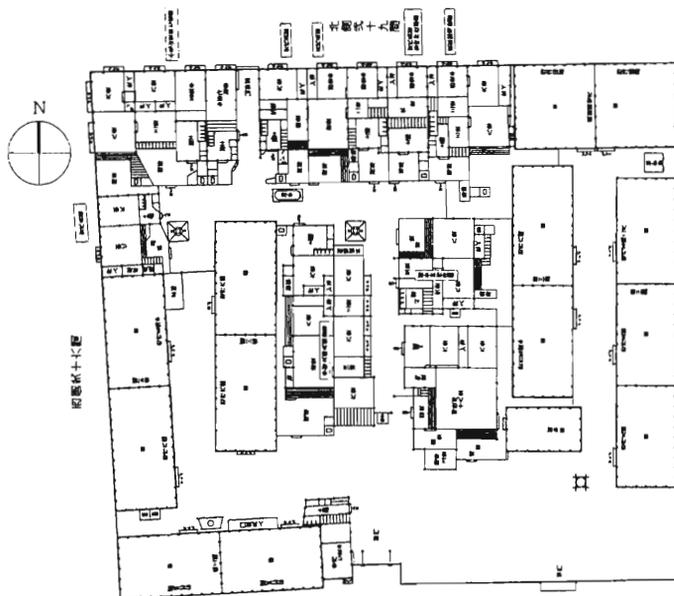


図2-2 津軽藩大坂蔵屋敷指図

主たる機能が、物産の取引にあった事が窺われる。御殿の空間構成については第3節で検討を行いたい。

家臣の住居である長屋は、別屋敷を含めすべての蔵屋敷に設けられている。その規模は、熊本藩が661坪と最大で、佐賀・広島・対馬・高知・津和野等の西国諸藩が大きい。東国諸藩では小規模で棟数が少ない事から、主な居住者は取引等の担当者であろうと推察される。

長屋が敷地に占める割合は、西国では7~10%、津軽藩では16%で東国の割合が高いが、これは東国の敷地が相対的に狭い事によるものである。なお、幾つかの藩において長屋について検討した結果、その平面構成等から役職と規模に関係が有り、階層性が認められる<sup>#13)</sup>。

米蔵は、ほとんどの屋敷で設けられている。熊本藩ではその規模が858坪と最大であるが、広島藩も2ヶ所の屋敷をあわせると838坪と熊本藩に匹敵する規模である。これらに次いで、長州・佐賀・岡山・高知等が大きい。東国では、秋田・津軽藩ともに230坪前後の規模である。米関係では、廻場・見所・改場等の米検査の関連施設が、概ねどの屋敷にも設けられていた。

米蔵以外では、西国では銀蔵、東国では金蔵がある。江戸時代の通貨は、西国が銀、東国が金であったが、蔵の名称の違いがこの事を反映している。さらに、津和野藩の紙蔵、広島藩の鉄蔵が確認でき、また佐賀藩では元禄頃に「伊万里陶器蔵」と称する別屋敷を設ける等、諸藩においては蔵米以外にも多様な特産物を扱っていた事が分かる。

蔵屋敷の業務に関連して、吟味方・米方・銀子方・勘定方等の名称が確認できるが、その他に陶器方のように特産品に関する役所や、出入りの町人等のための寄合所、米会所、蔵元会所等も設けられている。

船からの荷揚げは、一般に川岸に石段を設けた岩岐(がんぎ)に横付けされた荷船から屋敷内に運搬された<sup>#14)</sup>。しかし、佐賀藩蔵屋敷のように、荷船が屋敷内に直接入る事ができる船入堀を設けた藩もあった<sup>#15)</sup>。これらの藩はいずれも10万石以上、熊本藩に至っては54万石余の大藩である。船入堀の規模は、熊本藩が1000坪を超える巨大なもので、佐賀藩も460坪以上の規模である。しかし、船入堀をもつ藩では、船入りの入口部分に架けられた船入り橋の維持・管理も行わなければならない、その経済的負担の大きさが窺われる。このような形式の他に、高知藩や津和野藩蔵屋敷のように川岸の一部を凹形に加工したものや、津山藩蔵屋敷のように川中に杭を設けて区画したもの等がある。また規模も、巨大な熊本藩から約25坪の津山藩まで多様で、水運に恵まれた蔵屋敷では、荷揚げの際等の船の係留場所として確保されていた事が分かる。

蔵屋敷の神社は、表2-4に掲げたように多くのものが判明している。本来は、屋敷の鎮守として勧請された

表2-3 諸藩大坂蔵屋敷の建築構成

藩	石高 (石)	屋敷名	所在地 (丁目略)	指図年代		敷地規模 (坪)	居住施設			業務施設				その他の施設						所蔵・出典等								
				和暦	西暦		御殿	長屋	その他	米蔵	役所	会所	その他			表門	裏門	その他	番所		神社等	船入り	貸家	馬屋	その他			
佐賀	357000	大坂屋敷	天満11	元禄5	1692	約4200	○	17/293		32/350	×	春会所	米売場	米廻控所	銀蔵		3	1	水門	3	×	約474	×	2/20		日本生命保険相互会社		
佐賀		大坂屋敷		(寛保3)	1743	約4200	○	23/378		20/405	○	陶器方	米		<銀蔵>		<4>	<2>	水門	3	稲荷	約467	1/168	1/7				
佐賀		伊万里 陶器蔵	堂島3	<元禄>	1695	東:約566 西:約501	×	3/46		×		×	陶器蔵				1	1	小門	<1>	稲荷	×	×	×		『江戸建築叢話』		
熊本	540000	大坂屋敷	常安町	天明6	1786	約8270	○	12/661	仲仕6/口	10/858		吟味方、蔵、 留守	○	客家	米改場	銀蔵、小弘 蔵、積蔵他		3	×		1	神社2、 神宮寺他	約1134	2/230	2/24+口	松道具蔵、船番所、蔵5、 作事所他	熊本大学永青文庫	
対馬	20000	浜屋敷		不明		約313	×	8/41		3/36	×	×						2	×		×	×	×	2/20				
対馬		浜屋敷		不明		約364	×	○		<4/口>	×	×						1	1		×	×	×	×				
対馬		大坂屋敷	天満11	不明		約3402	○	4/<313>	襲込所等<5/ 174>、他3/72	×	×	×						1	1	通用2	5	×	×	×	3/22+口	土蔵<5/51>、作事方	大健民国民権編纂委員会	
対馬		大坂屋敷	天満11	不明		約3402	○	4/318	襲込所等<5/ 174>、他3/<72>	×	×	×							1	1	通用2	3	×	×	×	3/22+口	土蔵<5/51>、作事方	
対馬		大坂屋敷		不明		約803	×	5/口		×	<口>	×							1	×		1	稲荷	×	×	×	土蔵<2/16>、作事物置他	
対馬		大坂屋敷		寛政4	1792	約809	△	22/161		×	○	×							1	1	中門	1	×	×	×		作事場	対馬歴史民俗資料館
対馬	本屋敷		不明		約808	△	○		×	勘定所	×							1	1		3	×	×	×	○	籠籠入、鷹部屋29		
秋月	50000	大坂蔵屋敷	久保島町	嘉永2	1849	約344	<口>	2/21		2/口		宿り		米ふみ江				1			×	×	×	×	×		福岡市立博物館	
高知	202600	大坂屋敷	長堀白髪町	(寛政2~12)	1790	約4495	○	19/253+口		12/264		銀、米方	×					3	×	米出門2、用心 門3、櫓門2	3	稲荷、 警備宮	約159	5/267	×	庭道具蔵、家具蔵、籠籠蔵、 作事場、武器蔵、船道具蔵他	安芸市立歴史資料	
長州	369411	大坂屋敷	土佐堀1	<明和7以降>	1770	約3401	○	11/149	魂取固屋 他20/116	36/552		銀子方、買物 方、差引方	踏役他、 米、紙	米廻場	銀蔵		1	1	新門、不明門、 用心門	3	社	×	14/146	1/10		松道具蔵、道具蔵3、用紙蔵、 記録蔵、作事固屋、馬固屋他	山口県立文庫	
津和野	43000	紙蔵屋敷	江戸堀南4	天保12	1841	約1836	○	16/200						蔵3				1	1	紙蔵5/130	2	稲荷、御堂	約61	15/158	×		『江戸建築叢話』	
広島	426000	浜屋敷	不明	不明		約424	×	1/9		14/258	×	×						1			1	×	×	×	×		広島市立図書館	
広島		中之島屋敷		<17c末~18c初>	1699	約4000	○	18/323		21/404		勘定方							1	1	中門、物見門	3	×	約629	×	1/7	炭蔵	
広島		大坂屋敷	本五分一町	慶応2	1866	約4000	○	19/口		25/580		人札	人割						1	1	中門	3	稲荷、蔵島	約598	×	×	道具蔵、釣場、作事所、 長田屋土蔵	大阪商業大学商業史博物館
(三原)	23000	大坂屋敷	堂島4	不明		約287	<口>	2/14+口		5/80	×	×						1			<1>	×	×	×	×		三原市立図書館	
岡山	472000	大坂屋敷	慶安1	1649	約1100	○	4/59	与次右衛 門居所131	3/284	×		蔵出	表蔵 <2/21>	米見所				1	1		2	×	×	1/21	×			
岡山		中之島屋敷	築島町	<貞享3>	1686	約1154	○	10/116	町買居所17	3/260	×		○、 蔵元手代	米廻場	銀蔵	米弘部屋2	1	1	御成門	2	×		×	×	×		船道具入	岡山大学付属図書館
岡山		西信町屋敷	西信町	不明		約147	×	2/14		1/48	×	×							1	×		1	×	×	×	×		
岡山		天満屋敷	不明	不明		約1830	×	1/60		×	×	×							1	×		1	×	×	×	×		
津山	186500	大坂蔵屋敷	上中之島町	安政6	1859	約615	×	口	5/83	○、金方				平均場	金蔵				1	1		1	稲荷	約25	×	<1/8>	飛脚部屋他	津山郷土博物館
鳥取	325000	大坂屋敷	宗島町	不明		約5400	<口>	○	23/476	○、蔵方									1	1	御成門、不浄門	3	下山宮、地藏	約409	8/80		普請小屋他	鳥取県立博物館
津軽	47000	大坂屋敷		享保7	1722	約517	×	7/78		10/163	○	溜の間		金蔵				1	1		2	×	×	×	×		携屋	弘前市立図書館
津軽		大坂屋敷	天満11	<文化10~文政6>	1813	約740	×	8/123		13/214	○	<会所>	米廻場	金蔵				2	1		2	鎮守	×	×	×		携部屋	国立史料館
津軽		大坂屋敷		<天保>	1836	約740	×	8/<123>	仲仕部屋	14/216	○	<会所>	<米廻場>	金蔵					1	1		2	鎮守	×	×	×	<携部屋>	弘前市立図書館
秋田	200000	大坂蔵屋敷	堂島新地5	文化14	1817	約934	×	11/口		13/250	○	蔵元		米廻場	納蔵				1	1		2	稲荷	×	仲仕	×	道具蔵、普請小屋	秋田県公文書館
松代	120000	大坂屋敷	北浜1	慶応3	1867	約281	×	1/9		×	○	×	土蔵 <3/39.8>	座敷51坪				1	×		1	×	×	8/74	×		国立史料館	
桑名	150000	大坂屋敷	堂島新地4	万延2	1861	約416	×	口	14/口	蔵方、目附	客対間		<米廻場>	携場					1	×		○	×	×	×		道具入	『徳川時代の米穀配給組織』

\*屋敷名は、指図に具体的に記載されている場合はそれに従い、それ以外には「大坂屋敷」とした。 \*指図年代:○は推定(以下同じ)、\*居住施設 御殿:有無を○×で示した、△は留守居御殿。 長屋:規模を棟数/坪で示した(以下同じ)、例えば、「17/293」は17棟で総坪数が293坪を示す。 その他:居住施設に関連すると考えられるものを掲げた。 \*業務施設 米蔵・役所・会所:有無を○×で示した、特定の名称、例えば「陶器方役所」は「陶器方」と表示した。 その他:各屋敷独自の施設名称を掲げた。 \*その他の施設 門・番所・神社・船入り・貸家・その他とした。 門:「表御門」「御門」は表門、「裏御門」は裏門とし、その他の門として船入りの水門、通用門等

を掲げた。 番所:数を示した。 船入り:無い場合は×、ある場合は規模を坪数で示した。 貸家:無い場合は×で示した。 馬屋:馬屋の数と頭数を数値で示した。 その他:各屋敷のける独自の施設名称を掲げた。 \*番欄(三原)は、広島藩家老上田家支配。 \*石高・所在地:『国史大辞典』『藩史大辞典』『新修大坂市史第3巻』等による。

表2-4 諸藩大坂蔵屋敷の神社

行事	祭神等	蔵屋敷	所在地	備考
2月初午				諸方蔵屋敷賑わう
3月18日	柿本人麻呂	明石藩	西信町	本国より
4月17日		桑名藩	天満川崎	
6月		中国		諸方蔵屋敷
		薩摩		
6月11日	和豊神	宇和島藩	久保島町	本国より
6月14日		松江藩		
6月15日	稲荷	佐賀藩	天満1丁目	
6月15・16日	二井神	徳島藩	越中橋北詰東	
6月18日		柳川藩		
6月29・30日				住吉祭礼
7月頭より納涼				川床、涼舟多
8月15日神事能	金比羅宮 鎮守社5社	丸亀藩	越中橋北詰東 (常楽町)	
10月				新設登諸蔵屋敷入り
縁日	水天宮	久留米藩	常安郷町	毎月5日
	金比羅宮	高松藩	常安橋北詰西	本国より、毎月9・10日
	清正公等	熊本藩	庄村新四郎町	本国より、毎月24日
	菅公廟	福岡藩	白子島町	本国より、毎月25日
	玉寿稲荷	杵築藩	越中橋北詰西	嘉永5年12月領座
	徳島神社	広島藩	本五分一町	

\*行事・祭神等は『中之島誌』『繁花風土記』等による。

ものであるが、3.5で紹介するように蔵屋敷祭礼として、大坂の年中行事になり、祭礼の当日は多くの参詣人が訪れている。

### 2.3 御殿の空間構成

西国諸藩の独立した御殿は、接客・居住・業務・台所空間で構成されていた事はすでに明らかにした<sup>註16)</sup>。

ここでは、独立した御殿をもつ、岡山(貞享期)・広島(17世紀末)・長州・津和野藩と、対馬藩の留守居御殿、御殿はないがその機能を果たす座敷を有する秋月藩と広島藩家老の上田家蔵屋敷を取り上げ、各空間の構成について、図2-3をもとに検討を行う。

#### 1) 接客空間

御殿における接客空間の位置、規模、室構成等を見ると、岡山藩では、北東部に南面して「御広間」(10畳、床付き)、「御書院」(8畳、床付き)と「御座之間」(4.5畳)の3室を接客空間と見なす事ができる。広島藩では、南部に大きく設けられ、主要な接客空間は、「御次ノ間」(18畳)と「御書院」(14畳、床2ヶ所)の2間からなる。長州藩では、東面の大部分が接客空間であるが、最南部の「御二之間」(14畳)と「御参之間」(9畳、床付き)が主要な接客空間である。津和野藩では、北西部に位置し、「御書院次ノ間」(11.5畳)と「御書院上ノ間」(12畳、床付き)で構成されている。

対馬藩では、式台・寄附に接して、「次」(12.5畳)と「本座」(8畳、床・棚付き)、秋月藩では、式台・玄関を経て、「次ノ間」(10畳)、「御座敷式」(10畳、床・棚付き)、上田家では、玄関・式台から「御次」(6畳、床付き)と「御座敷」(10畳、床・棚付き)で構成されている。

以上から、独立した御殿の接客空間は、岡山藩以外は、式台・玄関から連続して接客空間が明確に確保され、室

数は3室構成で規模も大きくなる。さらに広島藩のように、床と床書院が設けられる等、式台や床付きの玄関の設置とともに、格式が整えられている事が判明する。岡山藩以外の3藩では、内玄関を設ける事で接客空間が明確になり、さらに他の空間の分離も促したと考えられる。また、対馬・秋月藩、上田家では、式台・玄関に接して、次の間と座敷の2室構成であるが、座敷には床・棚が設けられる等、格式が整えられている。

#### 2) 居住空間

御殿における居住空間の位置、規模、室構成等を見ると、岡山藩では、御殿北部の接客空間に北接して「物置」(4畳)、「御納戸」、「御寝間」(6畳)等で構成されるが、寝間が御座之間に隣接し、接客空間と居住空間の分離が明確でない。広島藩では、西部に南面して「御次」(10畳)、「御居間」(12.5畳)等、長州藩では、最南部の接客空間の西側に「御寝間」(10畳、床付き)等が設けられ、津和野藩では、最南部に「御居間二ノ間」(10畳)、「御居間上ノ間」(8畳、床付き)等で構成されている。

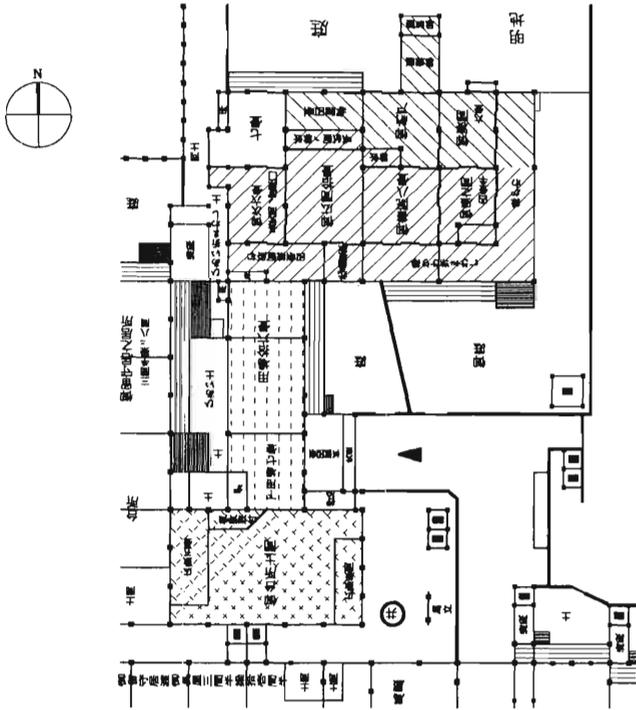
対馬藩では、接客空間の北側に「六畳」「九畳」の2室、秋月藩では、接客空間に接した「御居間二ノ間」(9畳、床付き)と「御居間」(6畳、床・棚付き)、居間に接した茶室、上田家では、玄関の右に接する「九畳」「八畳」で構成されている。

以上から、岡山藩以外の3藩の居住空間は、2室構成で御殿南部の日照条件の良い位置に設けられ、居住性に配慮されている。また、対馬・秋月藩、上田家でも2室構成で規模的にも大きな差はない。秋月藩では、居間に接して茶室が設けられ、日常生活以外に、接客用としても用いられたと推察される。

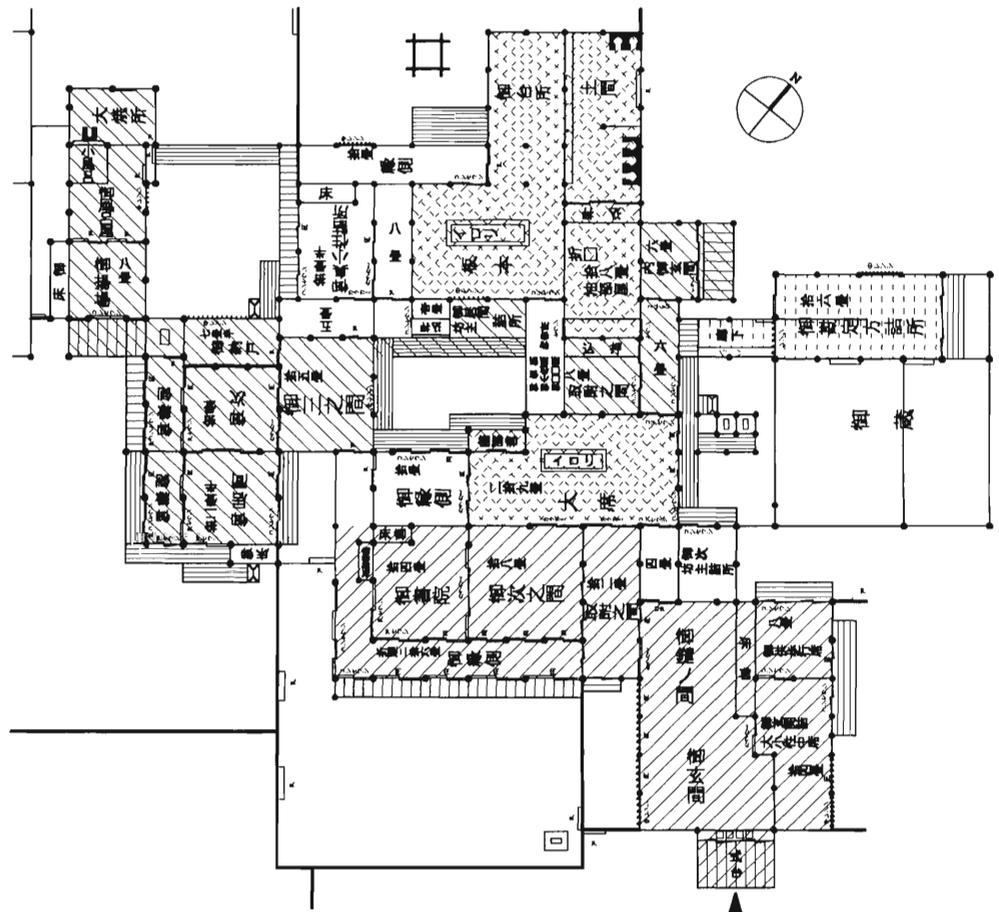
#### 3) 役所空間

岡山藩では、玄関に面して「下用場」(7畳)、「用場」<sup>註17)</sup>(16畳、床付き)が設けられ、これが居住・接客空間と台所空間を分離させている。広島藩では、北東部に「御勘定方詰所」(16畳)が設けられている。この詰所に接する「御蔵」は、入口の位置から銀蔵であった可能性が高い。長州藩では、西部の「御式台」から縦方向に「大坂御用所」(8畳)、「記録所」(10畳)、「上御用所」(6畳)等で構成されているが、御殿外にも役所が見られる事から、特に重要な役所が御殿内に設けられたと考えられる。津和野藩では、北東部の「内玄冠」に接する「役所次ノ間」(9畳)、「役所間」(10畳)や、中央部の「蔵元役居間」(12畳)等で構成されている。

対馬藩では、御殿外に役所が設けられているため、役所空間は見られない。秋月藩では、「留守居座敷」の対面に「御勘定住居」があり、ここの式台に面して「座敷」(8畳)や「溜り」が設けられている事から、住居と役所を兼ねていたと考えられる。上田家でも役所空間は見



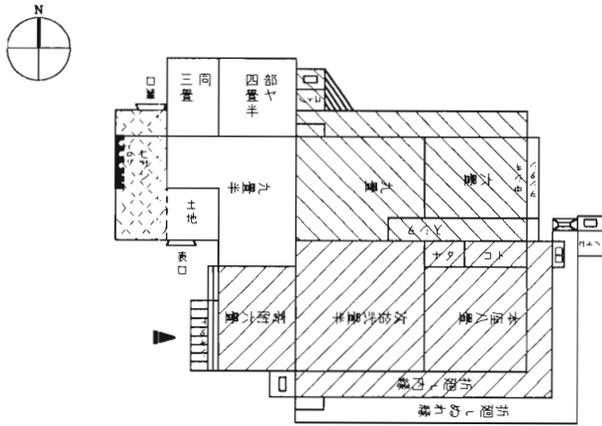
(a) 岡山藩



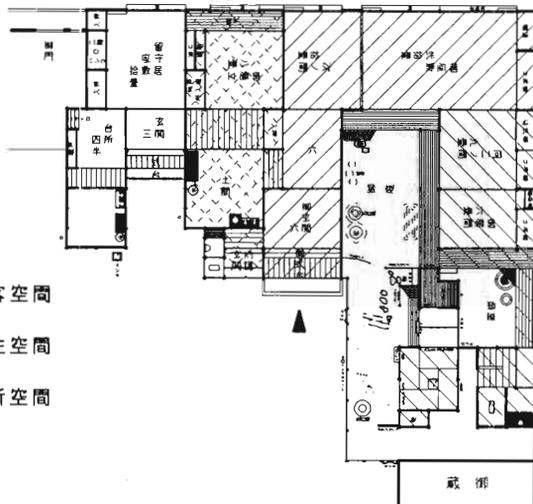
(b) 広島藩

図2-3 各藩御殿の空間構成

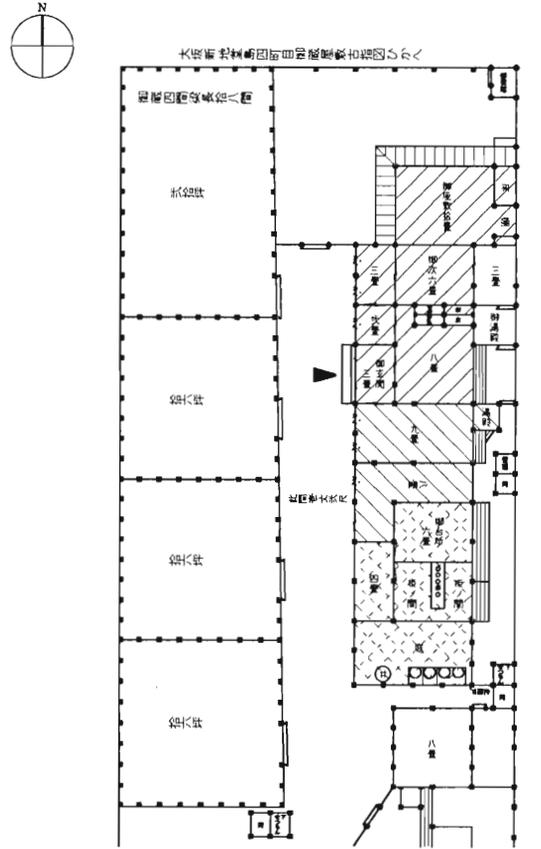




(e) 対馬藩



(f) 秋月藩



(g) 上田家

られないが、秋月藩と同様、「御座敷」で接客と役所業務が行われた推察される。

以上から、独立した御殿における役所空間は、玄関や内玄関付近に設けられ、この空間の独立と集中化が計られている。対馬・秋月藩、上田家では、座敷が役所・接客・居住機能等を兼ねていた事が窺われる。

#### 4) 台所空間

岡山藩では、「下用場」の南側に「御台所土間」が設けられ、西には留守居住居の台所があり、台所空間が1ヶ所にまとめられている。広島藩では、中央部から東に「大席」(29畳)や「板本」,「御台所」等が大きな部分を占めている。長州藩では、御殿中央部から西側に位置し、中庭をはさんで「御配膳所」(8畳),「囲炉裏」(14畳)と「御台所」「竈」等で、津和野藩では、御殿の東南部の「御台所」(12.5畳),「勝手詰所」(7畳)等で構成されている。

対馬藩では西北部の「ヒサシ」,秋月藩では、接客空間と留守居座敷との間の「土間」「御膳立」(8畳),上

田家では、居住空間に接した「御台所」(6畳)「板ノ間」「庭」等で構成されている。

諸藩の台所を見ると、藩主の滞在を想定して、広い台所空間を確保していると考えられる。

### 3 蔵屋敷の年中行事と蔵屋敷祭

大坂の蔵屋敷における年中行事については、宝暦8年(1758)の佐賀藩「年中行事」<sup>註16)</sup>があり、正月から10月までの行事が詳しく記されているので、年中行事を表2-5に示した。先に紹介した佐賀藩蔵屋敷の享保再建指図とも照らせあわせながら、蔵屋敷の1年を紹介したい。

#### 3.1 正月行事

新年を迎えた佐賀藩蔵屋敷では、正月3が日の間、表門の扉が開かれた。松飾りは3ヶ所の門に注連縄が張られ、式台前と台所口には松、米蔵には枝松が飾られた。そして御殿の式台の間には、麻袴姿の下目付・銀方下役

表2-5 佐賀藩蔵屋敷の年中行事

月	日	行事等	使用場所等	
1	1~3	年始松飾り 年頭廻礼	門に注連飾 台所に松飾 米蔵入口に枝松飾 御殿式台 留守居長屋式台	
	4	御蔵始	米会所 米廻場等	
	13	饗宴	御殿式台 勝手	
	14	大般若祈禱	御殿書院	
		正饗	留守居長屋	
		日待	勝手	
		留守居寄合	留守居長屋	
		稲荷講	屋敷、料理屋	
	2	15	宗門改	
	3		参勤交代	御殿(屋敷全体) 浜御門・表御門より屋敷入り
		目見	門外・式台等	
		発駕	東門より西へ	
		若殿来着	御殿書院・式台 備之間	
		他藩の挨拶	御殿式台	
5		稲荷講		
		端午祝儀		
	14	大般若祈禱	御殿	
6		日待	留守居長屋	
	14~15	稲荷祭り	表・浜門開放 稲荷社 米会所座敷	
		饗宴	役所	
	24~25	(天神祭)	提灯(浜通り米蔵前)	
	29~晦日	(住吉祭)	提灯(浜御門)	
7	3	中元	留守居仲間寄合連絡役へ 尾張屋七兵衛、銭屋文左衛門	
9		稲荷講		
5~6		重祓祝儀		
14		大般若祈禱	御殿	
		日待	留守居長屋	
14~15		稲荷祭り		
12	21	歳暮	留守居仲間寄合連絡役へ 尾張屋七兵衛、銭屋文左衛門	

・留守居付下物書役が詰めて、年頭廻礼の人を迎えた。一方、留守居長屋でも式台の拭板に薄縁、白州には長薄縁を敷き、廻礼客の応対にあたった。

正月4日には「御蔵始」の儀式が会所で行われた。蔵屋敷側では留守居役・目付・銀方役2人・雑務目付2人、物書役・銀方下役・上米方下役等が出席し、町方からは蔵屋敷名代の肥前屋次郎兵衛をはじめ銀主の長崎屋新六・升屋新右衛門等が加わっている。この行事には多人数が集まるので、米会所の10畳座敷だけでは間に合わず、隣接の12畳座敷と米廻場の土間に板敷と飾畳等を敷き入れて対処している。儀式は米蔵に「御蔵備物」と餅一重・鯛一尾・樽一を献じた。儀式後には宴会がもたれ、これは銀主の進物で賄われた。正月13日は蔵屋敷側が銀主や町人を招いて饗宴を催した。これは蔵始めの宴会に対する返礼の会で、御殿の式台の間で行われた。

正月14日には大般若祈禱が執り行われた。導師の南坊は、生国魂神社の別当職を勤める法案寺の住職である。当日の朝、導師と寺中僧6人は留守居長屋で粥飯の接待を受け、御殿の書院の間で祈禱を行った。その夜は「日待」と称して留守居長屋に蔵役人以下の者が集合して夜を明かす習いであった。

### 3.2 並方留守居役の仲間寄合

各藩の大坂蔵屋敷の最高責任者は留守居役であるが、互いの情報交換や諸種の申し合わせをする組織として「並方留守居仲間」があった。寄合の定例日は毎月3日と21日であったが、正月3日は年頭挨拶と重なるので、21日

が初寄合であった。その他に毎月9日には夜会が行われ、会合のあとは食事を共にした。この並方留守居仲間は「参会之儀者、屋敷亦ハ手狭ニテ候居宅ハ別料理茶屋有之候」とあって、大きな蔵屋敷では屋敷内で行われる事が多かったようである。

### 3.3 蔵米の蔵入れ

西国諸藩から瀬戸内海をとって大坂へ廻船で運ばれてくる蔵米は、登り米・登せ米と称された。廻船が安治川口に至ると、本船から上荷船・茶船の小運送の船に替えて堂島川をさかのぼり、蔵屋敷の浜地に到着する。

蔵米が到着すると、浜仲仕、蔵中仕が荷揚げをした。しかし直ちに蔵納めはせず、中3日間干す習慣があった。そこで屋敷内の米蔵の前に米俵を集めて、「はえ」と称する1山28俵(下から7・6・5・4・3・2・1俵)に積み上げ、雨覆いのために苫で覆った。こうして船中で吸収した水分を除去するのである。その後、米改めを行い、上・中・並の仕分けをして、蔵納めを行っている。

次に蔵出になると、会所の前に入札箱が用意され、入札が行われた。入札に参加できるのは堂島の米仲買に限られていた。出米は毎朝6ツ時から会所で扱ったが、会所には蔵方役や仲仕が詰めかけ、仲仕頭の下知で米方役、下目付が立ち会った。このように蔵米の収納、売買、蔵出は、米蔵と米会所の周辺に広い中庭を必要としたのである。

### 3.4 参勤交代

佐賀藩では通常、参勤交代の行列は大坂に立ち寄り、3日ほど滞在した。しかし下国する場合は大坂に寄らず、西国街道を西に急ぐ事もあった。御殿は藩主の逗留を目的に造立されたものである。従って、日常的な管理も厳重に行われた。

藩主の来坂予定が通報されると、留守居役は目付・修理方役・手伝役・下目付・小奉行・大工を伴って屋敷の内外を巡見し、修理箇所を点検した。屋敷の掃除は修理方が管轄し、実際の作業は中使が行った。また行列に随行する馬屋が船入堀の東側に仮設され、居間南庭の塀の外には組立式の番所が南北2ヶ所に建てられた。「年中行事」によると、藩主到着以前に蔵屋敷側で行う点検項目として、蔵屋敷全域の掃除と損傷箇所の点検、台所へつついの補修、馬屋の掃除と諸道具の点検調達、仮設馬屋の組立、門の左右の腰板・式台前の玉石等の汚れ落とし、御殿内部の掃除と前裁の手入れ、御殿の障子の張替と修繕、台所用行灯の張替等が列挙されている。

到着日が近づくと、表門・裏門・浜門および御殿式台前に大提灯が立てられ、到着直前には屋敷の外回りに塚砂が盛られた。また、藩主専用の居間・寝所・湯殿は特に厳しい点検が行われた。御殿の床下には犬等が入り込まないように詰船津舸子たちが検査し、平素は使わない

湯殿は入念に掃除をした上で、前もって水を入れて試し焚きをした。藩主が用いる湯水は、汲み立てに必要な船を繋ぎ置いて、そのつど補給させ、水越場小屋を建てて浄水した。

藩主の滞在中は、居間の床の間に飾る三方の上に大熨斗1把、大奉書紙2枚が置かれ、刀掛けもしつらえられた。居間の塀の外、すなわち船入堀の東北隅の2ヶ所の辻番所には詰船請手船舸子が2人ずつ昼夜を分かたず立番をした。表門・浜門の門番は羽織袴姿で平常の門番以外に詰船役から2人が応援に入り、夜は門の両側の大提灯がともされた。裏門も同様で、定番から1人、詰船役から2人が警護にあたった。裏門は藩主滞在中には開いたままで、突棒・差俣・琴地が1組立てられた。また中使の中から3人が修理方役人小屋に常置された。

参勤交代に随行するお供の侍は町中に分宿したが、行列の荷物を収納するために米蔵1棟があげられ、供の台所役に提供された。台所役は蔵屋敷に到着すると、蔵詰のものから藩主滞在中に必要な什器備品の提供を受け、藩主の身の回りの世話をを行う事になっており、蔵詰の者が世話をすることはなかった。

「年中行事」には若殿を迎える行事次第が記されている。それによると、御殿の式台長床の前に南坊・太融寺・安楽院等の僧侶や医師が並び、鍵の間の南敷居際には「出入銀主」が並び、畳1畳ほど下がって「御用間町人」が勢揃いして、奉行所で挨拶を済ませた若殿を迎える事になっていた。

### 3.5 蔵屋敷祭礼

2.2で紹介したように、各藩の蔵屋敷には国許等から勧請した神社が祀られていた。この神社の祭礼は大坂市中の町人にも開放され、やがて大坂の年中行事として定着した。文化11年(1814)刊の「繁花風土記」をみると、6月の項に「諸方御蔵屋敷祭礼 中国・出雲・阿波・肥前・筑後・薩摩(立売堀下屋敷) 柳川(右の外あまたあれども略す) 右祭礼の日は芝居、にはか、はなし、物まね、等の催しあり」と記されている。大坂の祭月である6月に、「蔵屋敷祭」とでも称すべき行事が行われ、年に1度、屋敷の内部が大坂市民に公開されていた。

このうち「肥前」と記された蔵屋敷祭礼が、佐賀藩蔵屋敷の稲荷社の祭礼である。この稲荷社は寛保3年(1743)に勧請されたもので<sup>19)</sup>、祭礼は陰暦6月14・15日の2日にわたって行われた。「年中行事」がまとめられた宝暦8年(1758)には、「近年ハ夥敷参詣人」で賑わうまでになっている。同記によると、祭礼の当日は表門と浜門が開放されて誰もが参拝できた。稲荷社には紋入りの紫の幕が張りめぐらされ、神前に供物が高く供えられた。また両門から稲荷社への道の両側には、人形等の作り物が並べられ、米会所東の間の10畳座敷には金屏風がたて

られ、床には毛氈が敷き詰められていた。夜には両門の大提灯がともされるとともに、花火が打ち上げられ、屋敷内は見物人で満ちあふれ「何れ之通りニも難取鎮」い状況であったと記されている。

幕末の安政2年(1855)に著された『摂津名所図会大成』には、「米市場の東、鍋島御蔵やしきの鎮守なり。例年六月十七日十八日祭礼あり、奉納の生花・つくり物等ありて、すこぶる賑わし」と記され、大坂の名物となっていた事が分かる。花火を除く行事になってはいるが、蔵屋敷祭礼は各藩にとっては神事であるとともに、市民にひらかれたイベントであったがゆえに、幕末まで続く祭礼として定着したのである。

他に有名な蔵屋敷祭礼として讃岐屋敷の金比羅社がある。『浪華の賑ひ』に、「高松金毘羅社(中の島、玉江橋の西、高松御蔵やしきに有り)、霊験いづれも勝劣は有るべからざれども、別て当社はその御国の第(やしき)なれば、殊更に新たなりとて晴雨の差別なく詣人多し。毎月九日十日には別て群衆なすゆゑに、この辺より常安町通に夜店ありて、賑はし。門前の通りの町を俗に金毘羅町といふ。」と記されている。金比羅社は航海守護の神として知られ、海運関係の業者が多い大坂では、とくに信仰が厚かったが、さらに水の神という事から、火伏せの信仰も加わって、町方の参詣も集めた。大坂市中の金比羅社のなかでも、讃岐金比羅宮の国許にあたるというので、高松藩の蔵屋敷に勧請された金比羅社が、とくに霊験あらたかとされたのである。

### 4 まとめ

本研究では、これまでまとめた研究がなかった大坂蔵屋敷の建築を取り上げ、まず全国に散逸している資料の所在調査から始めた。その結果、北は津軽藩、南は熊本藩に至る16藩の建築指図や関係資料を見出す事ができた。

これらの資料をもとに、まず建築構成について検討したところ、一般に大坂より西の西国諸藩の蔵屋敷は、敷地が比較的広く、周囲を米蔵や長屋で囲み、敷地の内部は御殿や銀蔵、米会所等の建物から成り立っていた。また最大規模の蔵屋敷には船入堀が設けられ、蔵米を積んだ船を直接屋敷内に引き入れ、荷揚げをしていた。一方、東国の蔵屋敷は、敷地が比較的狭く、敷地の内部に御殿がなく、また金蔵と呼ばれる等、西国諸藩とはかなり様相が異なっていた。敷地規模の違いは、藩の大小にもよるので一概には言えないが、東国諸藩の大坂進出は西国より遅れ、広い土地が確保できなかった事を思わせる。また、参勤交代時に藩主が滞在中の御殿は、東国の諸藩には必要がなかった。

次に西国諸藩の御殿を比較検討したところ、大規模なものでは概ね、接客空間、居住空間、役所空間、台所空間の4

つの空間に分離される事がわかった。接客空間は、2～3室で構成され、床の間を設けて格式を整えている。居住空間は、一般に南面し、居住性を配慮した独立性の高い空間となっている。このように空間を明確に分離するために、内玄関が設けられていた。指図年代の新しい津和野藩の御殿では、玄関の近くに接客空間、南側の最奥に居住空間、内玄関から中央部にかけて役所空間、東部に台所空間と、各空間の位置が他藩に比べて比較的明確に分けられている。なお、西国の小藩の蔵屋敷には独立した御殿はなく、接客・役所等の業務と住居が兼用されているが、格式が整えられた座敷が設けられている。小藩の蔵屋敷は大規模な蔵屋敷の機能を縮小したものであると考えられる。

最後に蔵屋敷の業務と年中行事を紹介し、蔵屋敷の機能と空間の関係を考察した。その結果、蔵米の搬入や収納に関して、米蔵や米会所の他、海路を運ばれてきた廻米を乾燥させたり、入札や出米のために大きな空閑地を確保していた事が明らかになった。また、参勤交代時の藩主を迎えるため、御殿の維持管理に努力が傾けられた事、御殿は藩主の滞在だけでなく、様々な行事や寄合にも使われていた事等も判明した。さらに、蔵屋敷の鎮守社で年に1度の祭礼が開かれた時は、一般の町人も屋敷内に入るのを許された。諸藩の神社の祭礼は「蔵屋敷祭礼」と呼ばれ、大坂の年中行事の1つになっていた。大坂蔵屋敷は、経済的な機能だけでなく、大坂の都市文化を考える上でも重要な施設であった事が分かる。

## <注>

- 1) 森泰博「大坂蔵屋敷の成立と変貌」(『蔵屋敷Ⅱ』大阪商業大学商業史博物館史料叢書第2巻、平成13年3月)によると、蔵屋敷の設置者のほとんどが大名で、それ以外では、家臣、旗本、寺社等が設けている。
- 2) 佐古慶三『佐賀藩蔵屋敷払米制度』(大阪市立高等商業学校大阪商史学研究室紀要第1冊、大阪史学会、昭和2年4月)、野村重臣「大阪に於ける蔵屋敷について(1)～(4)」(『同志社論叢』第33号、昭和5年12月、同34号、昭和6年2月、同35号、昭和6年6月、同40号、昭和8年2月)、竹越與三郎『日本経済史研究 第9巻』(平凡社、昭和10年)、宮本又次「大阪の岡山藩の蔵屋敷史料の紹介」、同「福岡藩と大阪との関係史料紹介」、作道洋太郎「細川藩の大坂蔵屋敷について」(宮本又次編『大阪の研究 第2巻』所収、清文堂、昭和43年)、宮本又次「佐賀藩蔵屋敷の史料紹介」、同「大阪の蔵屋敷と蔵役人」(宮本又次編『大阪の研究 第3巻』所収、清文堂、昭和44年)等。
- 3) 森泰博「府内藩大坂蔵屋敷の業務」(『大阪の歴史』第25号、昭和63年10月)、「鳥取藩大坂蔵屋敷の成立」(『商学論究』第37巻1・2・3・4・合併号、1989年10月)、「大坂蔵屋敷の成立」(『大阪経済のダイナミズム』清文堂、平成2年)、「初期の高知藩大坂蔵屋敷」(『経済学論究』第44巻第3号、1990年12月)、「福岡藩大坂蔵屋敷」(『西南地域史研究』第8輯、文献出版、平成6年)、「金沢藩大坂蔵屋敷の新設」(『経済学論究』第52巻第2号、1998年12月)、「佐賀藩大坂蔵屋敷の成立」(『商学論究』第46巻第3号、1999年3月)、前掲1)「大坂蔵屋敷の成立と変貌」、「大坂蔵屋敷」(『福岡県史通史編福岡藩(一)』、平成13年)等。
- 4) 渡辺忠司「大阪三郷町統き在領における蔵屋敷の設置について」(『大阪の歴史』第51号、1998年5月)、塚田孝『近世の都市社会史』(青木書店、1996年)
- 5) 『旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構調査報告』(大阪市文化財協会、1991年3月)、『広島藩大坂蔵屋敷跡』(同協会、1997年3月)、伊藤純・豆谷浩之「新出広島藩大坂蔵屋敷絵図について」(『大阪の歴史』第51号、1998年5月)。
- 6) 筆者らは、蔵屋敷の建築・住居史的研究として以下の論文を発表している。「弘前藩の蔵屋敷について」(『大阪市立大学生活科学部紀要』第46巻、1998年)、「松代藩の大坂蔵屋敷について」(『大阪市立大学生活科学部紀要』第47巻、1999年)、「佐賀藩大坂蔵屋敷について」(『日本建築学会計画系論文報告集』第530号、2000年4月号)、「奥羽諸藩の蔵屋敷の建築について」(『歴史科学』第159号、2000年5月)、「高知藩屋敷の建築構成について—大坂・京都・伏見屋敷を中心に—」(『建築史学』第35号、2000年9月)、同「小室藩大坂蔵屋敷の変貌」(『大坂城と城下町』所収、思文閣出版、2000年12月)。
- 7) 訪問した施設は、以下の通りである。  
弘前市立図書館、秋田県公文書館、岩手県立図書館、国立史料館、大阪商業大学商業史博物館、大阪市立博物館、大阪城天守閣、京都大学付属図書館、佐治家、津山郷土博物館、鳥取県立博物館、島根県立図書館、岡山大学付属図書館、三原市立図書館、広島市立中央図書館、山口県文書館、安芸市立歴史民俗資料館、高知県立図書館、高知市民図書館、山内家宝物資料館、福岡市博物館、熊本大学付属図書館、柳川古文書館、佐賀県立図書館、対馬歴史民俗資料館。上記施設の他に、田代和生氏(慶應義塾大学教授)、山本一雄氏(住友史料館副館長)、今井典子氏(住友史料館主席研究員)にもご高配を賜りました。末筆ながら記して深謝申し上げます。
- 8) 『大阪編年史第7巻』(大阪市立中央図書館、昭和44年)
- 9) 『大阪編年史第13巻』(昭和49年)
- 10) 「増脩改正摂州大阪地図」
- 11) 「繁花風土記」(『大阪経済史料集成第11巻』所収、同刊行委員会、昭和52年)
- 12) 日本生命保険相互会社所蔵
- 13) 前掲6)「高知藩屋敷の建築構成について—大坂・京都・伏見屋敷を中心に—」
- 14) 諸侯蔵屋敷の図(『摂津名所図会 第1巻』所収、臨川書店、平成8年)。
- 15) 熊本・広島・佐賀・鳥取・久留米・徳島・高松藩に船入りが設けられていた(『大阪編年史 第26巻』、昭和53年)。
- 16) 前掲6)「佐賀藩大坂蔵屋敷について」
- 17) 『日本国語大辞典 第4巻』(小学館、昭和55年)によると、御用場として、「公務をとり行うところ」の意味がある。
- 18) 「年中行事」(『蔵屋敷Ⅰ』所収、但し11月12月は欠本。大阪商業大学商業史博物館史料叢書第1巻、平成12年3月)。他に慶応3年(1867)眉山玉霞の作になる「久留米藩大坂蔵屋敷絵図」は、正月から歳末にいたる風景38図が残されているのでこれも参考になる。
- 19) 前掲18)「年中行事」